

振動魔

海野十三

青空文庫

僕はこれから先^まず、友人柿^{かき}丘^{おか}秋^{あき}郎^{ろう}が企^かてた世にも奇怪きわまる実験について述べようと思う。

柿丘秋郎と云つたのでは、読者は一向興味を覚えないだろうと思うが、これは無論、僕が仮りにつけた変名であつて、もしもその本名を此^ま処^{しよ}に真^ま正^{しよ}直^{じき}に書きたてるならば、それが余りにも有名な人物なので、読者は吓^あツと驚いてしまうだろう。それにも拘^かわらず、敢えてジャーナリズムに背^そむ^む、彼の本名を曝^{ばく}露^ろしない理由

は——と書きかけたものの、僕は内心それに言及することに多大の躊躇ちゆうちよを感じていることを告白せねばならない——彼の本名を曝露ばくろしない其の理由は、彼の妻君である柿丘呉子かきおかくれこを、此後に於ても出来得るかぎり苦しめたくないからなのである。呉子さんは野獸的な今の世に、まことに珍らしいデリケートな女性である。それをちよつと比喩たとえてみるなれば、柔い黄色の羽根がやつと生えそろつたばかりのカナリヤの雛仔ひなを、ソツと吾わが掌てのうち握にぎつたような気持、とでも云つたなら、仄ほのかに呉子さんから受ける感じを伝えることができるように思われる。庭の桐きりの木きの葉崩はくずれから、カサコソと捲まきおこる秋風が呉子さんの襟脚えりあしにナヨナヨと生え並ぶ生毛うぶげを吹き倒しても、また釣瓶つるべ落ちに墜おちると

いう熟柿じゅくしのように真赤な夕陽が長い睫まつげをもった円つぶらな彼女の双そうの眼を射当あてても、呉子さんの姿は、たちどころに一抔の水蒸気と化して中空に消えゆきそうに考えられるのだった。ああ僕は、あだしごとを述べるについて思わず熱心でありすぎたようだ。

このような楚々そそたる麗人れいじんを、妻と呼んで、来きたる日ひ来きたる夜よを紅こう閨うけいに擁ようすることの許された吾が友人柿丘秋郎こそは、世の中で一番不足のない果報かほう者もの中ちゆうの果報者だと云わなければならぬのだった。若し僕もが、仮りに柿丘秋郎の地位を与えられていたとしたら——おお、そう妄想もうそうしたばかりでも、なんと甘い刺戟しげきに誘われることか——僕は呉子さんのために、エジプト風の宮殿を建て、珠しゆぎ玉よくを鏤ちりばめた翡翠色ひすいいろの王座しように招じ、若し男性

用の貞操帯というものがあつたなら、僕は自らそれを締めてその鍵を、呉子女王の胸に懸け、常は淡紅色の垂幕を距てて遙かに三拜九拝し、奴隸の如くに仕えることも決して厭わないうであらう。しかしながら友人柿丘秋郎の場合にあつては、なんとその身識らずの貪慾者であらう。彼は、もう一人の牝豚夫人という痴れものと、切るに切られぬ醜關係を生じてしまったのだつた。

その牝豚夫人は、白石雪子と云つて、柿丘よりも二つ歳上の三十七歳だつた。だが、その外貌に、それと肯く分別臭さはあつても、凡そ彼女の肉体の上には、どこにもそのように多い数字に相応わしいところが見当らなかつたのだつた。とりわけ、頸

筋から胸へかけての曲線は、世にもあでやかなスロープをなし、その二の腕といわず下肢といわず、牛乳をたつぷり含ませたかのように色は白くムチムチと肥え、もし一本の指でその辺を軽く押したとすると、最初は軟い餅でも突いたかのようにグツと凹みができるが、臆てその指尖の下の方から揉みほぐすような挑んでくるような、なんとも云えない怪しい弾力が働きかけてくるのだ。それにまだ一度も子供を産んだことのない牝豚夫人は、この数年来生理的な関係か、きめの細かい皮膚の下に更に蒼白い脂肪層の何ミリかを増したようだった。夫人が急に顔を近付けると、彼女のふくよかな乳房と真赤な襦袢との狭い隙間から、ムツと咽ぶような官能的な香気が、たち昇ってくるのだった。

柿丘秋郎が、こんな妖花ようかに係るかかわようになったのは、彼の不運ともいべきだろう。柿丘でなくとも、どのような男だつて、雪子夫人のような女に出遭であうと、立ち竦すくみでもしたかのようにな彼女から遠のくことが出来なくなるだろう。だが柿丘秋郎を永らく、雪子夫人の肉体への衝動を起させることなしに救つていたものは、実に柿丘秋郎にとつて彼女は、恩人の令夫人だつたからである。

僕は柿丘秋郎の奇怪な実験について述べると云つて置きながら、あまりに永い前置きをするのを、読者はもどかしく思われるかも知れないが、実はこれから述べるところの、一見平凡な事実が、後に至つて此の僕の手記の一番大事な部分をなすものなのであるからして、そのお心算つもりで御読みねがいたい。

さて、柿丘秋郎が恩人とあがめるといふ、いわゆる牝豚夫人の
夫君は、医学博士白石右策氏しらひしうさくだった。白石博士は、湘南しやうなんに
大きいサナトリウム療院を持つ有名な呼吸器病の大家だった。
一般にサナトリウム療院といへば、極ごくく軽けい症しやうの肺病患者ば
かりに入院を許し、第二期とか第三期とかに入つたやや重症の患
者ていに対しては、この療法が適しないという巧みな口実を設けて、
体ていよく医者の方で逃げるのだった。だが吾が白石博士の場合にか
ぎり、どんな重症の患者も喜んで入院を許したばかりではなく、
博士独得の病巢びやうそう固化法こかほうによつて、かなり高率の回復成績をあげ
ていたのだった。それは世間によく知られているカルシウム粉末
を患者の鼻の孔から吸入させて、病巢びやうそうに石灰壁せつかいへきを作る方法いささと些

か似ているが、白石博士の固化法では、病巢の第一層を、或る有機物から成る新発明の材料でもつて、つちやくへきまく強韌きようじんでしかも可撓かとうな密み着壁膜つちやくへきまくをつくり、その上に第二層として更に黄金おうごんの粉末をもつて鍍金とくきんし、病菌の活躍を封鎖したのだった。

この白石博士を、柿丘秋郎は恩人と仰いでいると、茲ここに誌したが、柿丘も実は博士のこの新療法によつて、更生の幸福を掴つかんだ一人だった。そして柿丘が、もう一ヶ月遅く、博士の病院の門をくぐるか、乃至ないしはもう一ヶ月速く博士の診断を仰あおいだとしたら、彼は更生こうせいの機会を遂に永遠に喪つたことだろう。それと云うのが、博士がこの新療法に確信を得たばかりのところへ柿丘は馳けつけたことになり、いわば博士の公式な第一試術患者となつた

わけで、また一面において柿丘の病状は第三期に近く右肺の第一葉をすっかり蝕むしばまれ、その下部にある第二葉の半分ばかりを結核菌に喰いあらされているところだったので、若もしもう一と月、博士の門をくぐるのが遅かったとすると、流石さすがの博士もその回かいしゆ春んについて責任がもてなかつたのだった。

ここに一寸だけ、柿丘秋郎の輪廓りんかくを読者に示さねばならぬ羽目になつたけれど、柿丘秋郎は彼の郷里おかやまの岡山に、親譲りの莫ば大くだいな資産をもち、彼の社会的名声は、社会教育家として、はたまた宗教家として、年少ながら錚々そうそうたるものがあり、殊ことに青年男女間に於ては、湧きかえるような人気がある人物だった。ちようど病気に倒れる直前には、その宗教団体の選挙があつて、彼は

猛然なる運動の結果、その弱年にも拘らず、非常に重要な地位に就いた。凡そ宗教家とか社会教育家というものほど、奇怪な存在は無いのであつて、彼等のうちで、真に神に仕え世の罪人を救うがためにおのれの一命をも喜んで犠牲にしようという人物は、たいへん稀であつて、彼等の多くは、たまたま職業を其処にみいだしたのであつて、それから後は無論のこと職業意識をもつて説教をし、燃えるような野心をもつて上役の後釜を覗み、妙齡の婦女子の懺悔を聴き病氣見舞と称する慰撫をこころみて、心中ひそかに怪しげなる情念に酔いしれるのを喜んだ。柿丘秋郎の正体もつきつめて見れば、此の種の人物だったが、割合に小胆者の彼は、幸運にも今までに檻樓をださずにやってきたの

だ。これは僕が妬みねたごころから云うのではない。

柿丘が、あの病気に罹かかつてその儘呼吸ままいきをひきとつてしまつたら、彼の競争者は、たちまち飢うえたる虎狼ころうのごとくに飛びかかつて、柿丘の地位も財産ものこらず平たいらげてしまい、その上に不名誉な背は任いにんのかずかずまで、有ること無いことを彼の屍しかばねの上に積みかさねたことだつたらう。柿丘秋郎は、その間の雰囲気を、十二分に知っていた。

(もうこれは駄目だ。最後の覚悟をしよう)とまで、決心した彼だった。そのような危ピンチ機を、白石右策博士は見事にすくつたのだ。柿丘にしてみれば、博士に救われたのは、病氣ばかりではなく、彼の社会的地位も、彼の家庭も、彼の財産も、ことごとく

博士の手によって同時に救われたことになるのだった。博士のサナトリウム療院から退院するという日、柿丘は博士の足許にひれふして、さんぜん濟然たるなみだ涙のうちに、しばらくは面をあげることができないほどだった。

柿丘秋郎と白石博士との両家庭が、非常に親しいつきあい交際をするようになったのは、実にこうした事情に端をたん発していた。

この二組の夫婦は、しばしば一緒になってお茶の会をしたり、その頃流行り出したばかりの麻雀マジヤンを四人で打ったり、日曜日の午後などには三浦三崎みうらみさきの方面へドライブしてはゴルフに興じたきょうり、よその見る眼も睦むつまじい四人連れだった。しかしながら、博士と雪子夫人と、柿丘かきかと呉子くれこさんとの関係は、いつまでもそう単純ではあり得なかつた。

そのことを始めて僕が知つたのは、或る夏の終り近い一日だった。雪子夫人には、博士との間にどういふものか子種こだねがなかつた。それで多量の閑暇かんかをもてあましたらしい夫人は、間もなく健康を恢復かいふくして更生こうせいの勢いものすごく社会の第一線にのりだして行つた柿丘秋郎の關係している各種の社会事業に自らすすんで、世

話役をひきうけたのだった。その夏は、海岸林間学校が相模湾さがみわんの、とある海浜かいひんにひらかれていたので、柿丘夫妻は共にその土地に仮泊かはくして、子供たちの面倒をみていた。一方雪子夫人は、東京の郊外を巡回する夏期講習会の幹事として、毎日のように、早朝から、郊外と云つても決して涼しくはない会場に出向いては、なにくれと世話をやいていたのだった。

そこで僕自身のことを鳥渡ちよつとお話して置かねばならないが、僕は元来、柿丘と郷里の中学を一緒にとおりすぎてきた、いわゆる竹馬ちくばの友ともというやつで、僕は一向金もなく名声もない一個の私立中学の物理教師にすぎなかつたのであるが、幼馴染というものはまことに妙なもので、身分地位のまるつきり違つた今日でも真の

兄弟のように呼びかけたり、吾儘わがままを云いあうことができの
った。僕は、この有名なる富める友人のお蔭で、その邸やしきに出入
ては、自分の財布に相談してはいつになつても得られないような
御馳走ごちそうにありついたり、遇たまには独り身の鬱うつけつ血ちを払うために、町
はずれの安待合やすまちあいの格子こうしをくぐるに足るお小遣こづかいを彼からせしめ
たこともあつた。彼が呉子くれこさんを迎えてからは、そう大おおびらには、
せびることもできなかつたが、彼の代りに出版だの代だい作さくをしたり、
講演こうげんの筋を書いたりして、その都度つど、学校から貰う給料に匹敵す
るほどの金を貰つていた。呉子さんはこの辺の事情を、うすうす
知つてはいたのであろうが、生れつきの善良なる心で、僕をいろ
いろと手厚く歓待かんだいしてくれたのだった。

僕は、柿丘邸の門をくぐるときには、案内を乞わずに、黙つて入りこむのが慣例になつていた。柿丘が呉子さんを迎えてからは、この不作法極まる訪問様式を、厳格げんかくに改めたいと思つたのではあるが、どうも習慣というのは恐ろしいもので、格子こうしにちよいと手がかかると、僕はいつの間やらガラガラとやつてしまつて、氣のついたときには、茶の間の座蒲団ざぶとんの上にチヨコナンと胡坐あぐらをかいているという有様だつた。しかし僕は、柿丘邸の玄関と茶の間と台所と彼の書齋と、僕が泊るときにはいつも寢床をとつてもらうことになつてゐる離座敷はなれざしきとの外には、立ち入らぬ様にきめていた。しかし、たつた一度、眼も醒めるさような紅模様べにもようのフカフカする寢室の並んだ夫妻のベッド・ルームを真昼まっぴるのことだか

ら誰も居ないだろうと思つて覗のぞきに行き、しかも失敗したことはあるが、まあそのような話は、しない方がいいだろう。

さて、その夏の或る日のことだった。

僕は講習会で、つまらぬ講義をすませてから（その講習会に、例の牝豚夫人が参加していたことは云うまでもない）、その夜のうちに、一寸読んで置きたい本があつたので、その本が柿丘の書よだな棚にあることを兼ねて眼をつけておいたものだから、今日行つて借りてこようと思ひ、麻布本村町あざぶほんむらちようにある彼の柿丘邸かに足を向けたのだつた。

玄関をガラリと開けると、僕はいつも履物はきものを見る習慣があつた。並んでいる履物の種類によつて、在宅中の顔触れかおぶも知れ、そ

の上に履物の主の機嫌がよいか、それとも険悪かぐらいの判断がつくのであった。その日の玄関には、一足の履物も並んで居なかつた。では、おん大始めたい夫人まで、まだ海辺かいへんから帰っていないのだなと思つたことだつた。

それなら、ソツと上りこんで、茶の間で昼寝をしているかも知れない留守女中のお芳よしを吃驚びっくりさせてやろうと思つて、磴音あしおとを盗ませて入つていったのだつた。ところが茶の間にはお芳の姿が見えなかつたばかりか、勝手元までがピツシヤリ締めてあり、座蒲団の位置もキチンと整頓ちようじかんしていて、シャーロック・ホームズなはずとも、お芳は相当長時間ちようじかんの予定で外出したらしいことがわかつた。だが、それにしては、何という不用心ぶようじんなことだ。現に

僕という泥棒がマンマと忍びいったではないか。

だが、このときだった。ボソボソいう声はどこからともなく聴えたように思った。耳のせいかしらと、疑いながら、ジツと耳を澄ませていると、いやそれは空^{そら}耳^{みみ}ではなかつた。たしかに人声^{こゑ}がするのだ。しかもそれは此の家の中から洩れ出でる話声だった。

柿丘夫妻はもう帰っていたのだったか。僕は立ちあがるとその声のする方へ、二三步踏みだしたのだったが、およそ人間が、こういう機会にぶつかることがあつたなら、十人が十人（悪いこととは知りながら）と言^い訳^わけを吾れと吾が心に試みながら、そつと他人の秘密を盗みぎきするものなのである。僕の場合に於ても、たちまち全身を好奇心にほてらせながら、小さい冒険の第一行動

をおこしたことだった。ああ、しかしそれは何という大きい衝動を僕にあたえたことだったろう。話し声の一人は柿丘秋郎にちがいなかつたけれど、もう一人の話し相手は呉子さんではなく、なんとそれは白石博士夫人雪子女史だったではないか。

勝手を知った僕は、逸いちはや早く身をひるがえ翻して、書斎のカーテンの蔭にかくれることに成功した。そこからは隣りのベッド・ルームの対話が、耳を蔽おおいたいほど鮮あざやかに、きこえてくるのだった。

そこに聴くことのできた話の内容は、一向に二人の関係について予備知識をもたなかつた僕を、驚きようがく愕ふちの淵ふちにつきおとすに十分だった。読者は、次のくだりを読んで、僕の呆然あぜんたりし顔を想像していただきたい。

「貴女あなたはどうしても、僕の希望に応じて呉れないのですか」

「いやなことですわ、ひどい方」

「こんなに僕が、へいつくばってお願いをするのに、それにおう応じてはくたさらないのですか」

「あたしは、どうあつてもいやなんです」

「ほんの僅かな時間でよいのですから、この上に寝て下さい」

「いくらなんでも、貴下あなたの前に、そんなあられもない恰好をするのは、いやですわ」

「お医者さまの前へ行つたのだと思つて我慢して下さい」

「お医者さまと、貴下とは、たいへん違いますわ」

「なんの恥かしいものですか、僕が——」

なにやら、せり合うような^{けはい}気配。

「暴力に訴えなさるのですか（とキリリとした雪子夫人の^{こわね}声音、

だが語尾は次第に柔かにかわる）まア男らしくもない」

「でも今を置いては、機会は容易に來ないのですから」

「あたしは、貴下の御希望に添う気持は、一生ありません。貴下

も神に^{つか}仕える身でありながら、まだ生れないにしても、一つの生^せ

いれ^いみ^みず^かか
靈を自ら手を下して暗闇^{やみ}から暗闇^{やみ}にやっってしまうなんて、残酷

な方！ ああ、人殺し……」

「大きい声をしないで下さい。どうしてこれだけ僕が説明をするのに判つてくれないんです。貴女が僕の胤^{たね}を宿^{やど}したということが

判ったなら、僕は一体どうなると思うのです。社会的地位も名声も、灰のように飛んでしまいます。そうになると貴女と違って、今までのように贅ぜいたく沢たくな逢あう瀬せを楽しむことが出来なくなるじやありませんか。僕の病気が再発しても、最早もはや博士は救って下さいません。それを考えて、僕は愛して下さるのだったら、僕の言うことを聞きいれて、この簡単な墮胎手術をうけて下さい」

「何度おつしやつても無駄よ、あたしはもう決心しているのよ。あたしがお胎なかにもっている可愛い坊やを、大事に育てるんです」
「ああ、それでは、博士を偽いつわって、博士の子として育てようというのですか」

「まあ、どうしてそんなことが……。右策うさくとあたしとの間に子供

が無かつたのは、右策自身が子胤こだねをもちあわさないからおこつたことなんです。右策は、それを学者ですからよく知っているのです。だから、あたしが今、妊娠したとしたら、その場であたしの素行そこうを悟さとつてしまいます」

「だが、僕の子だかどうか判らないとも云える……」

「莫迦ばかなことをおつしやいますな。生れてきた胎児たいじの血液型を検査すれば、それが誰の胤たねであるか位は、何の苦もなく判つてよ、それに貴方あなたは右策うさくとは切つても切れない患者しゆじいと主治医しゆじいじゃありませんこと。あなたの血液型なんかその喀痰かくたんからして、もう夙とつくの昔に判つていることでしょうよ」

「ああ、それでは貴女はこれからどうしようというのです。この

僕をどんな目に遭わせようとするのです」

「あたしは、貴方との間にできた坊やを、大事に育てたいんです。あたしは、もうすっかり決心しているのよ。右策うさくがこのことに氣付いたときは、出て行けというなら出て行くし刑務所へ送りこんでやろうというなら送りこまれもする。しかしいつか、あたしは自由の身となつて、坊やと二人で貴方があたしのところへ歸つてくるのを待つんです」

「ウン判つた。さては生れる子供を証拠にして、僕の財産をすっかり捲きあげようというのだな。金ならやらぬこともない。だが、交換条件だ、その胎児を××しまつて下さい」

「ほほほ、そううまくは行きませんかよ。お金よりも欲しいの

は貴方です。この子供が生きている間は、貴方はあたしの懐ふところから脱けだすことができないんですわ。あたしは、あなたの地位を傷きずけなくてすむもつとよい方法も知っていますのよ。だけど、どうあつても貴方を離しませんわ。貴方はあたしの思うままに、なつていなければならぬんですわ。背そむけば、貴方の地位も名声もたちまち地に墜おちてしまいますよ。あたしがしようと思えば、ね。だがそれまでは、貴方は無事に生きてゆかれるのよ。貴方の生命は、一から十まで、みんなあたしの掌ての中うちに握にぎられてしまつてるのよ、今になつてそれに気のついた貴方はどうかしてやしない：

…」

「……」

「アツ、貴方は短銃ピストルを握っているわね。あたしを殺そうというのでしよう。ええ判っているわ。でもお気の毒さまですわね。あたしを殺したら、その翌日と言わず、貴方は刑務所ゆきよ。貴方はあたしが殺されたときのことを準備していないようなぼんやり者だと思っているの？ あたしが死ぬと同時に、一切が曝露ばくろするという書類と証拠が、或る所に保管されているのを知らないのねえ」

「ああ、僕はおおぼかもの大莫迦者だつた」

鳴咽おえつする柿丘みだの声と、淫らみだがましい愛撫あいぶの言葉をもつて慰めなぐさはじめた雪子夫人の艶語えんごとを其その儘まま、あとに残して、僕はその場をソツと滑るように逃げだすと、跣足はだしで往来へ飛びだしたのだった。

3

その後、柿丘秋郎と、白石博士夫人雪子とは、すくなくとも外見的には、大變平和そうに見えた。室内にレコードを掛けて、柿丘と雪子とが相抱いて踊りはじめると、あからがお 緒顔の博士は、柿丘夫人呉子さんを援たすけておこして、鮮あざやかなステップを踏むのだった。秋という声が、どこからともなく聞こえてくると、急に誰もが緊張した顔付をするのだった。柿丘秋郎は、かつての日の雪子夫

人の恐^{きようはく}迫^{ふる}に震えあがつたのを忘れたかのように、事業や講演に熱中した。だが、その度^{たびごと}毎に、雪子女史の姿が影のようにつきまどつていたのは、寧^{むし}ろ悲惨であると云いたかつた。

柿丘秋郎が、自邸の空地の一隅^{いちぐう}に、妙な形の掘立小屋を建てはじめたのは、例の密会事件があつてから、三十日あまり過ぎたのちのことだつた。その掘立小屋は、窓がたいへん少くて、しかもそれが二メートルも上の方に監^{かんぼう}房の空気ぬきよろしくの形に、申^{もうし}わけばかりに明^あいていた。小屋が大体、形をととのえると、こんどは電燈会社の工夫が入つてきて、大きい電柱を立てて、太い電線をひっぱったり、いかめしい碍^{がいし}子を^ねじこんだりしたすえに、真黒で四角の変圧器まで取付けていった。それがすむと、厚ぼつ

たいフェルトや石綿いしわたや、コルクの板が搬はこび入れられ、それはこの小屋の内部の壁といわず、天井といわず、床といわず、入口の扉ドアといわず、六つの平面をすっかり三重張りにしてしまった。室内へ入ると、まるで紡績工場の倉庫の中に入ったような、妙に黴かびくさい咽むせるような臭気がするのだった。だがその割合に呼吸ぐるしくないのは、電気装置が働いて、室内の空気が、外気と巧みに置換ちかんせられているせいだったかも知れない。三重壁へきたい体も完成すると、機械台がいく台も担かつぎこまれ、そのあとから、一台のトラツクが、丁寧な保護ほごわく柵をかけた器械類を満載まんさいして到着した。若い技師らしい一人が、職工を指揮して三日ばかりで、それ等の器械類をとりつけると、折から、講演先から帰ってきた柿丘秋郎に、

委細の説明をしたあとで、挨拶をして引上げて行つた。

一体これから此の部屋で、何が始まるうというのだ。

柿丘が呉子さんに説明したところによると、今回協会の奨励しょうれい

いきん

金を貰つて、旅順りょじゆん大学の東京派遣研究班が、主として音響

学について研究するということに決定きまつたそうで、それには実験

室を建てねばならないが、適当な地所が見付からないために、こ

れも社会奉仕の一助として、柿丘は自分の邸内の一部を貸しあた

えることにしたそうである。かたがた、柿丘自身も、かねてから、

科学というものに大きい憧れあこがを持っていたこととて、これを機会

に、初等科的な実験から習いはじめるという話だつた。

呉子さんは、柿丘の言葉に、これツぱかりの疑惑ぎわくもさしはさま

なかつた。一日のほとんど大部分の時間を、家庭の外で暮す主人を、実験室とはいえ自邸のいちごう一隅にとどめることの出来るのは何となく気強いことだったし、食事についても、何くれとなく情のこも籠つた手料理などをすすめることが出来ることを考えて、大變嬉しく思つたほどだった。

しかし、ありようを言えば、これは柿丘秋郎の奇怪きわまる陰謀にもとづく実験が、やが聴て開始されようとするのに外ならなかつた。さて其の実験というのは、——

さきに、雪子夫人から威嚇いかくされて、墮胎手術をはねつけられた柿丘秋郎は、その後、このことを思いとどまつたかのように見せていたが、内心は全く反対で、あの時、夫人の深しんじょう情と執拗しつよう

な計画とを知ったときに、これはどんな犠牲を払っても、墮胎を
実行しなければならぬと思つた。その方法も、夫人の生命をお
びやかすものであつてもならないし、しかも夫人が全く氣のつか
ぬ方法でないと思つた。それは、たいへんに困難な方法だ。
いや一体、そのような方法があるものか無いものか、それが案ぜ
られもした。しかし自らの智慧ぶくろの大きいことに信念をもつ
柿丘は、なにかしら^{きつと}屹度、素晴らしい手段がみつかるだろうと考
えた。

彼は、或る時は図書館に^た立て籠^{こも}つて、沢山の書籍の中をあさり、
また或る時はそれとなく医学者の講演会や、座談の席上に聞き耳
をたてて、その方法を^{もさく}模索したのだった。夫人を美酒^{びしゆ}に酔わせる

か、鴉片あへんをつめた水管の味に正体を失わせるか、それとも夫人の安心をかちえたエクスタシーの直後の陶酔境とうすいきように乗じて、墮胎手術を加えようか、などと考えたけれど夫人はいつも神経過敏で、容易ぜんごふかくに前後不覚おちいに陥らなかつたので、手術を加えても、その途中の疼痛とうつうは、それと忽ちたちま気がつくことだろうと予測された。一度夫人に、手術を加えたことを嗅ぎつけられたが最後、すべては地獄へ急行するにきまつていることだつた。なんとかして、雪子夫人が、全く気のつかないうちに、それは手術であるとも、彼の持つた毒物であるとも感付かないように、極めて自然にことをはこばなければならぬのだつた。それは、いかに叡智えいちにたけた彼にとつても、容易なことで解決できる謎ではなかつた。

だが幸運なる彼は、とうとう非常にうまい方法を知ることができた。

それは、物体の振動を利用する方法だった。いまドロップスの入っていた空き缶あかんの蓋を払いのけて底に小さな孔あなをあけ、そこに糸をさし入れて缶を逆さに釣り、鉛筆の軸じくかなにかでコーンと一つ叩いてみるがいい。そうするとこの缶は形の割合には大きい音をたてて、グワーンと、やや暫しばらくは鳴り響いているだろう。強く叩けば更に大きい音響を発する。しかしその音おん色しよくは、いつも同じものである。それというのが、こうした箱や壺つぼめいたものには、その寸法からきまるところの振動数というのがタツタ一つきりあるので、一体振動数というのは音色そのものに外ならないも

のだから、それで同じ器うつわを叩けば、音の大小はあっても、音色はいつも同じなのである。

そこで、もう一つのドロップの空き缶あかんをとりあげて、前と同じように、糸でとめて、ぶら下げて置く、その上で、最初の缶を思いきり強く叩くのである。するとたちまち大きい音がするであろうが、音がした上で、手でもってその缶を握って振動を止めるのである。そのとき耳を澄ませて聴くならばいま叩いた缶は手でおさえて振動をとどめたにも拘かかわらず、それと同じような音色ねいろの音が、かなり強く聞こえるではないか。はて、その音は、何処で鳴っているのだろうか。

よく気をつけてみるなれば、あとから糸をつけて釣つるした叩き

もしないドロップの缶が、自然にグワーンと鳴っているのである。これを共鳴現象きようめいげんしやうというが、二つある振動体が同じ振動数をもっているときには、一方を叩くと振動が空中をつたわって他のものを刺戟することとなる。その刺戟がもともと同じ性質の刺戟だもんで、棒で叩かれたと同じ効果ききめをうけ、そいつも鳴り出すのだ。ちよつと考えると、それは一方が鳴ると、それについて自然こたに応えるかのように鳴り始めるようにみえるのだ。若し、別にそつと釣して置いた振動体が寸法のちがうものであつては効果ききめがない。例えば大きい缶詰の空いたものなんかでは駄目である。つまり振動数が同じでないものでは駄目である。

あとは釣るした缶に、飯粒めしつぶかなんかを、ちよつと付着させた

上で、もう一度始めに釣した缶をグワーンと、ひっぱたいてみると、あとから釣るした缶がたちまち振動して鳴りだすのは勿論のことであるが、見て居ると、缶かんの壁があまりに強く振動するものだから、其のうちにととうとう、密着していた飯粒が剥はがれてポロリと下に落ちてくるのである。——こいつを使って墮胎だたいをやらせようというのが、柿丘秋郎の魂胆こんたんだった。

子宮しきゆうは茄子なすの形をした中ちゆうくう空うつつわの器である。そう考えると、

子宮にもその寸法に応じた或る振動数がある筈だ。妊娠後二ヶ月フや三月や四月の胎児は、ドロップの缶に付着した飯粒めしつぶも同然で、ほんの僅かの力でもって子宮壁に付着しているのだった。注射器を使って子宮の中に剥離剤を注入すれば、その薬品が皮膚おかを蝕す

ため、胎児と子宮壁をつないでいる部分の軟い皮が腐蝕して脱落し、墮胎の目的を達するのだった。それを機械的にやるのが、柿丘秋郎のとうとうという方法であつて、雪子夫人の外部から、強烈な特定振動をもつた音を送つてやると子宮はたちまち激しい振動をおこし、揚句の果に彼と夫人との間にできた胎児が、ポロツと子宮壁から剥れおちて外部へ流れ出し、完全に墮胎の目的を達しようというのだった。

この世にも奇抜な惨忍きわまる方法を見つけた柿丘秋郎は室内を跳ねまわつて歓喜したことだった。彼は二万円近くの金を犠牲にし、旅順大学の研究班をダシにつかつて、その邸内の一隅に、実験室外には音響の洩れないという防音室を建て、多く

の備付器械そなえつけきかいのうち、予めあらかじ、子宮の寸法から振動数をきめて、そのような都合のよい音を出す器械を混ぜて購入したのだった。その機械の据付も終わった。器械は、彼あやつが操るのに便利なように、一切の複雑な仕掛けを排し、押おし 釦ボタン一つをグツと押せば、それで例の恐ろしい振動が出るように作らせることを忘れなかった。もつともこの器械を作った人は、魔人のような彼の使用目的をすこしも知らなかったのだった。

さてこの上は、何とか言葉をかけて、雪子夫人をこの実験室に引き入れることができればよいのだった。それはなんの造作ぞうさもないことだった。彼が唯一言、夫人にむかつて、「奥さん、例の旅順大学に使わせる実験室がすっかり出来上って、今日の夕方まで

には、机も器械も全部とりつけが出来るんですよ」とさえ云えばよかつた。あとは夫人の方で心得て、

「あら、そお。それじゃ、あたし夜分に、ちよつと、お寄りするわ。ね、いいでしょう、あなた」

と云うに違いないのだった。そして事實はすべてその筋書どおりに、とりはこばれたのだった。時計が七時をうつと、実験室の扉がコトコトと打ち鳴らされた。室内にひとりで待ちかまえていた柿丘は、その音を聞くと、ニヤリと薄気味の悪い嗤わらいをうかべて、やおら、椅子の上から立ちあがった。

内部から柿丘が扉を開くと、とびつくようにしてよろめきながら、雪子夫人が入ってきた。

「貴女お独り？」

と、柿丘はきいた、念のために……。

「ええ独りなのよ。どうしてさ、ああ、奥さんのことなの。奥さんなら、いまちよいとお仕事が、おあんなさるのですって」

雪子夫人は、お饒しゃべり舌をしたあとで、娼婦しょうふのように、いやらしいウイंकを見せたのだった。

「奥さん、今夜はどうかなたんですか、お顔の色が、すこし良くないようですね」

「あら、そお。そんなに悪い？」

「なんともないんですか」

「そう云われると、今朝起きたときから、頭がピリピリ痛いよう

でしたわ。きつと、しん芯が疲れきっているのねえ」

「用心しないといけませんよ。今夜はなる可べく早くおかえりになつておやすみなさい」

「ええ、ありがとう、秋郎さん」

そう云つて、夫人はそつと額かかに手をやった。夫人は、巧みにも柿丘の陰謀から出た暗示にかか罹つてしまつたのだった。

それから柿丘は、室内をひとひ巡り夫人を案内して廻つた。最後に二人が並んで立つたのは、例の奇怪なる振動を出すという音響器の前だった。柿丘は出鱈目でたらめの実験目的を説明したうえで、右手を押しおし鉦ポタンの前に、左手を、振動を僅かの範囲に変えることの出来る装置の把手ハンドルに懸けた。これは、万一計算が多少の間違いを

もっていたときにも、この把手をまわすことによつて振動数を変え、例の恐ろしい目的を果そうという仕組みだった。

「じゃ、ちよつと、その音響を出してみますよ。たいへん奇妙な調子の音ですが、よく耳を澄ましてきいてみると、なにかこう、ほくかてき牧歌的な素朴な音色があるのです」

柿丘秋郎は、とら捉えた鼠をなぶ黽つてよろこぶ猫のような快味を覚えながら、着々とその奇怪な実験の順序を追つていったことだった。

「まあいいのねえ、早くやつて頂戴な」

と恐ろしい呪いのろの爪が、おのれの身の上に降るとも知らない様子で、雪子女史は実験を待ち侘わびるのだった。

「では始めますよ。ほーら、こんな具合なんです……」

柿丘は右手の指ゆびさき尖でもって、押釦をグツとおしこんだ。たちま忽ち鈍いウーンという幅の広い響きが室内に起つたが、その音は大変力の無い音のようで居て、その癖に、永く聴いているとなにかこう腹の中にはちゆうるい爬虫類の動物が居て、そいつがムクムクと動き出し内蔵を鋭い牙でもって内側からチクチクと喰いつくような感じがして、さすが流石に柿丘も不愉快になつた。だが手軽くこの音響をやめては、折角の墮胎作用も十分な効目を奏さないことだろうと思つて、我慢に我慢をして押釦から指尖を離さなかつた。

「なんだか、やけに地味な音なのねえ」

「どうです、このほっかてき牧歌的なねいろ音色は……」

「牧歌的なもんですか、地面の下でもぐらがうごめ蠢いているような音

じやありませんか」

そう云うと、夫人はこの実験台の前から、スツと向うへ歩みはじめた。柿丘はホツとして押おし釦ボタンから指ゆび尖さきを離した。

夫人は真直に歩いて片隅へまで行つたが、やがてそのまま柿丘の方へ歸つてきた。

「ねえ、このお部屋に、御不淨ごふじょうはないのですか？」

夫人は顔をすこしばかり擡しかめ、片手を曲げて下ツ腹をグツと抑えるようにしていた。その言葉を聞いた柿丘は、頭がグラグラとするのを覚えて、思わず、手尖てさきにあたつた実験台の角をギユツと握りしめたのだつた。そして、言葉も頓とみに発し得ないで、反対の側の片隅を、無言むごんの裡うちに指した。そこには黒い横長の木札の上に、

トイレットという文字が白エナメルで書きしるされてあった。

雪子夫人は、吸いつけられるように、その便所の扉ドアの方に歩みよった。

柿丘は、化物のような大おおぐち口を開いて、五本の手の指をグツと歯と歯の間にさし入れると、笑いとも泣いているとも分つことの出来ないような複雑な表情をして、ワナワナとその場にうち震ふるえていた。

ボタンと、荒つぽく便所の扉のしまる音がして、雪子夫人がヨロヨロと立ち現れた。その面かおいろ色は蒼そうはく白で、唇は紫色だった。ひよいと見ると夫人は右手に何かをぶら下げているのだった。

「秋郎さん」夫人の空虚うつろな声が呼びかけた。

「……」

「あなたの祈りは、とうとう聞き入れられたのよ。あたしたちの可愛い坊やは——ホラあなたにも会わせたいわ」

ピシヤリと、柿丘の頬に、生なまぬるいものが当たると、耳のうしろを掠かすめて、手ハンカチ帛らしい一掴つかみほどのものがパツとひるがえ翻ひるがえつて落ちた。

「吁あツ——」と声をあげて、柿丘は頬つぺたを平手で拭ぬぐつたが、反射的に、その生なまぬるいものの付着した掌てを、グツと顔の前にさしだした。うわツ、血だ、血、血、ぬらぬらとした真紅な血けっか塊いだった。

柿丘はその場に崩れるように膝を折って倒れると、意識を失つてしまった。

どの位、時間が経ったのか。彼が再び気がついたときには室内に白石夫人の姿は最早見えなかった。

(兎に角、うまく行つた。真逆、なにがなんでも、音響振動で夫人に墮胎をさせたとは、気がつくまい。胎児さえ流れてしまえば、もうこちらのものだ。おい柿丘、お前の勝利だぞ。一つ大きい声で愉快に笑え！)

そう自分の心を激励したものの、声を出そうとしても、胸が抑えつけられるようで、思うようにはならなかった。気がつくと、咽喉の下あたりと思われるあたりに、何か南^{かほ}瓜^{ちや}のようなものが悶^{つか}えるようで、気持がわるかった。そいつを吐こうと思つて、顎^{あご}をグツと前に伸ばす途端^{とたん}に、咽喉の奥が急にむずがゆくなつてエ

ヘンと咳せいたらば、ドツと温いものが膝ひざ頭がしらの前にとび出してきた。

「こいつは、失敗しまった！」

柿丘秋郎には、普通の眼には見えない胸おくそこの奥底おくそこがハッキリ見えた。そのうちにも、あとからあとへと激しい咳せきに襲せわれそのたびにドツドツと、鮮せんけつ血けつを吐つき散ちらした。柿丘かきの前の血溜ちたまりは、見る見るうちに二倍になり三倍になりして拡ひろつて行いった。それとともに、なんとも云えない忌いやな、だるい気持きもちに襲せわれてきた。すると、全身がガタガタと震えだして、いくら腕うでを抑おさえつけても、已やむということなく、終ついには、実験室全体おおじしんが大地震おおじしんになつたかのように、グラグラ振動をはじめたと錯覚さつかくをおこした。灼やけつ

くような高熱が、全身から噴きだした。

「ほんませいけつかく奔馬性結核！」

彼は床の上に転倒しながら、ハッキリ彼自身の急変を云いあてたのだった。

4

吾が柿丘秋郎は、なんとという不運な男であつたことだろう！

折角せつかく苦心に苦心を重ねた牝豚夫人の墮胎術には成功したのだ

つたが、その夜彼は突如として大咯血だいかっけつに襲われ、急に四十度を超える高熱にとりつかれて床についてしまった。彼の意識は、もうかなり朦朧もうろうとしてしまったが、吸入の酸素瓦斯さんそガスを、もつと強く出してくれるようにということと、どんなことがあつても主治医である白石博士を呼んではならないということ、家人に要求したのであった。何故に名医白石博士を謝絶したのであるか。生命をかけてまで、排撃はいげきしたのであるか。

それについて、柿丘は遂に言葉をつぎたすことなく、二日後に長逝ちようせいしてしまった。ここに泪なみだなくしては眺めることの出来ないものがある。それは、二十年の春を、つい此の間迎えたばかりの呉子さんが、早や墨染すみぞめの未亡人という形式ほうむに葬られて、来る

日来る夜を、じゃくめつ 寂滅と長恨ちやうこんとに、止め度もない泪なみだを絞しぼらねばならなかつたことだつた。

身寄りのすくない呉子さんに、何くれとなく力ちから添そえをすることの出来るのは、僕一人だつた。白石博士も、雪子夫人も急によそよそしくなつて、極ごく稀まれにしか、呉子さんの許を訪ねて来はしなかつた。僕は、亡き友人柿丘になり代つて、いや柿丘のなし得たその幾層倍の忠実さをもつて、呉子さんを慰なぐさめたのだつた。呉子さんも、僕を亡おとき良人の兄弟同様の人物として、何事につけ僕を頼り、たとえば遺産相続のことまでも、すこしも秘密にすることなく、僕に相談をかけるという有様だつた。呉子さんと僕との心が、いつとは無しに相寄あいよつて行つたのは、誰にも肯きいて貰える

ことだろうと思う。

柿丘の死後二ヶ月経った晩ばんしゅう秋の或る朝、僕はその日を限つて、呉子さんの口から、或る喜ばしい誓約をうけることになつてゐるのを思い浮かべながら、新調の三つ揃いの背広を縁側えんがわにもち出し、早くこれに手をとおして、午後といわず、直ちに唯今から、呉子さんを麻布あさぶの自邸に訪問しようと考えた。

僕は、帯をほどいて衣服をうしろにかなぐり捨てると、猿股さるまた一枚になつて、うららかな太陽の光のあたる縁側にとび出し、

ほの温いふくしやねつ輻射熱を背中一杯にうけて、ウーンと深い呼吸をして、
まぶた瞼をとじた。

「町田狂太さんまちだきようた」

不意に、庭の方から人の近づく気配がした。眼を眩まぶしく開くと、三十あまりの若い青年紳士が、こちらを向いてニコヤカに笑いながら、吾が名を呼びかけた。

「僕は町田ですけれど、貴方あなたは、どなたでしたかね」

僕も、ついつい笑いに誘さそわれて、朗ほがらかに云つてのけた。

「ちよいとお話を伺うかがいたいことがあるんですが……。僕は、こういう者なんでして」

そう云つて青年紳士は、一いちよう葉の名刺をさしだした。とりあげて読んでみると、

「私立探偵 帆村ほむら莊そう六ろく」

こんな名刺なんか、破いて捨てちまえだと思った。しかしそん

なことは色にも出さず僕は云った。

「どんな御用か存じませんが、まあお掛けなさい。一寸着物を着ますから……」

そう云つて僕は、着物のある奥座敷の方へ、とび込もうとする
と、

「いや、動くと、一発。横よこツ腹はらへ、お見舞い申しますぞ」青年は、
おちついて云つた。

ふりかえつてみると、青年紳士の右手にはキラリと、ブローニ
ングが光っているのだった。

僕は、裸のまま、新調の洋服をソツと傍へのけると、
縁えん側がわに腰を下ろした。

「もう、お覚悟はついたことでしょうが、柿丘秋郎殺害犯人として、あなた貴方を捕縛ほぼくします。令状は、ここにちゃんとあります」

帆村と名乗る私立探偵は、白い紙きれを、僕の方に押しやった。
「莫迦なことを云つちやいかん」

と、僕は云つた。

「柿丘は僕の親友でもあり、兄弟同様の仲なんだ。怪しい人物は、彼をめぐる女性たちそれからやぶいしや藪医者なんか、沢山あるじゃないか」

「そんなことは、貴方のお指図さしずをうけません。知りたければ云つたげますが、僕は柿丘夫人から依頼をうけて、もう一と月あまり、あらゆる捜査をやつてきたんです。この期ごに及んで、そうじたば

たすることは、貴方の虚名きよめいを汚けがすばかりですよ。神妙になさい。

貴方は、音響振動によつて、婦人の墮胎だたいをはかつたり、結核患者の病巣びょうそうにある空洞くうどうを、音響振動を使つて、見事に破壊し、結核病を再発させるばかりか、その一命を断たとうという恐ろしい企てくわだをした人なんです。しかも、柿丘氏には、すこしもそんな話をせず、夫人を墮胎だたいさせることばかりに注意力を向け、おのれの空洞くうどうが激しい振動をおこして、結締織けつたいしきを破壊させ、自分の生命を断つてしまふなどということを一向に注意してやらなかつたのです。無論、すべては、物理教師だつた貴方の悪知恵だつたのです。貴方はそのことを、巧みに隠していましたね。

貴方は、柿丘氏死亡の責任を、主治医の白石博士に向けるように故意にさまざまの策動をしたり、博士夫人が痴情ちじょう関係から加害でもしたかのように仕むけました。

だが、すべては私達商売人にとって、あまりに幼稚なお膳立てでした。

それに貴方は、一つの重要な失策をしている。貴方は、細さいしん心の注意を払ったにも係かかわらず、柿丘氏の日記帳を処分することを忘れていた。或いは、貴方はこの日記帳を読んだことはあるのだが、柿丘氏が、あのことについては、ほんのちよっぴりも日記帳に記述をさけているのを見て、すっかり安心されたのかも知れませんか。

だが、この私は、重大な一行を見遁みのがしはしなかつた。それは、柿丘氏が今年の秋の始めに、日×生命の保険医の宅で、正面からと側面からとの、二枚のレントゲン写真を撮ったという記事だったのです。

レントゲン写真は、正面又は背面から撮影するものであつて、けつして側面からうつすようなものじゃない。そこを私は、不審に思ったのです。それから私は、日×生命の保険医を訪ねて、いろいろと絞あげつた揚句、貴方があの保険会社の外交員と、保険医とをうまく買収して、あの奇抜なレントゲン写真をとらせ、その種板を持ってゆかれたことを知りましてねえ、町田狂太さん、貴方は、正面と横とから、柿丘氏の右胸部にある大きい空くうどう洞の体積

を、精しく計算なすつたのでしたね。その結果、なんと皮肉なことに、柿丘氏の結核空洞は、白石博士夫人の子宮腔の大きさと、ほぼ等しい大きさをなして居ることを発見したのです。

一石にして二鳥、なんにも知らぬ柿丘氏の手を借りて、その人を自滅させると同時に、その美しい呉子夫人を己が手に収めようとした貴方だったのです。敏感なる夫人は、健気にも、みずから進んで貴方の懐中に飛びこみ、或る程度の確信を得られると、早速私に真相を探求してもらいたいという御依頼があつたのです。

さて、貴方の買収された保険外交員と保険医とは、私と一緒に、この垣の向うに控えて居ります。もし久濶を叙した

いお思召ほしめしがああるなら、早速御さつそくおひき合あわせしようと思ひますが、如何いかでしようか。

その間に私は家宅捜査をさせて頂いて、振動魔しんどうまの貴方が、計算せられた紙かみぎれや、また柿丘氏には不合格になつたと思わせた生命保険に、貴方が莫ばくだい大な保険金を契約して、柿丘氏を殺したあとで巨額の死亡支払金を詐取さしゆしたその証拠書類やらを発見させて頂きたいんです。なにか、私に仰おつしや有ることはありませんか」その青年探偵帆村莊六と名乗る男は、痛快に僕あばの正体を発あいてしまつたのだつた。

それから、満二ヶ年の歳月が流れて、公判のあとに公判が追しいかけ、遂ついに先頃、大審院の判決もすんで、ここに一切の訟訴手しょうそてつ

続^づきが閉鎖されることになった。それから僕は、この拙^{つたな}い懺悔^{ざんげろ}録^くを書き綴^{つづ}りはじめたのだったが、不思議なことに、どうやらやつと書き終えた今夜は、僕が味わうことの出来る最後の夜らしい。そのことは前日から感付いていたので、別に臆^{おく}もしない。この思い出ふかい夜が静かに明けはなれると共に、この監房を立ちいでて、高い絞首台にのぼらねばならないのである。

青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第1巻 遺言状放送」三一書房

1990（平成2）年10月15日第1版第1刷発行

初出：「新青年」博文館

1931（昭和6）年11月号

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：t a k u

校正：土屋隆

2007年8月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

振動魔

海野十三

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>